

大地を編む

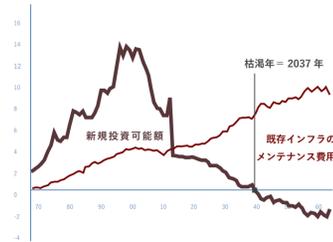
内田久美子
早稲田大学

山と水の中で生きながらえていくために、本計画は個人と大地に対する社会の姿勢を問直すものであり、個人と大地の接点として建築をとらえなおした。

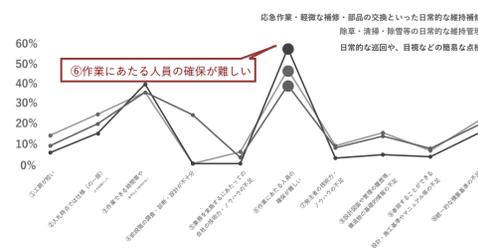


0 | 都市における個人と大地について

生活基盤の老朽化



インフラの日常的な維持管理における問題点について



生活とその基盤の維持更新について

都市に生活している私たちは、大地の上ではなく、大地の上の土木の上、さらには建築の中という守られた空間の中で暮らしているという意識でいる。しかし安全なはずだという想定を超えたときにはじめて大地の上に生活しているという事を再認識する。

生活とその基盤の維持更新について

生活基盤は50年を過ぎるものが多く、老朽化問題を抱えたものが増加している。縮小社会に向けて、最大の問題は作業員の確保であり、国は国民の理解と協力の促進を求めている。対して国民は、インフラの維持管理に対して、住民協力の拡大をするべきであり、経済的負担ではなく、美化・清掃・点検・工事など、積極的に関わるべきだという国民の意向が見て取れる。

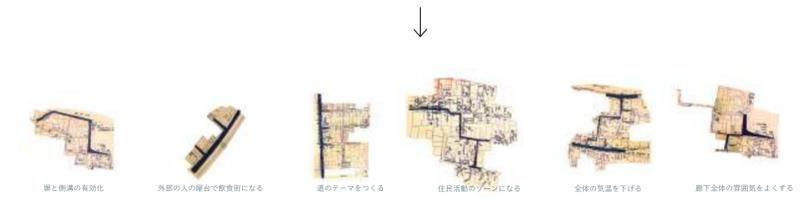
近年のアダプトプログラムの事例

生活基盤は50年を過ぎるものが多く、老朽化問題を抱えたものが増加している。縮小社会に向けて、最大の問題は作業員の確保であり、国は国民の理解と協力の促進を求めている。対して国民は、インフラの維持管理に対して、住民協力の拡大をするべきであり、経済的負担ではなく、美化・清掃・点検・工事など、積極的に関わるべきだという国民の意向が見て取れる。

今後求められる生活像

私たちは領域を超えて、生活基盤・共空間に対して関与してく生活王が求められる。そしていかにして継続可能であるか、ただの負担で終わらないようにするかが課題として問われている。

1 | 都市内集落生活者研究 - 自発的な住環境改善の成立過程の分析



自発的な住環境改善行為の記録

彼らの行為の成立要因を分析すると、①小さな単位の集積であること②日常のリズムに沿っていること③既存のものを転用することの3つに大別された。どれも日常的な欲求から生まれた小さな行為の積みかさねであり、都市計画によって生まれた空き地を使いこなしている例や、政府の規制を超えて住みこなしを行うといった熱量を見てとれた。

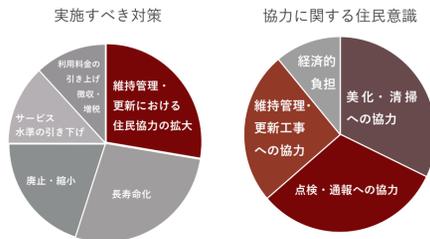
路地で連鎖し性格を強める

自宅の前の改善にとどまらず、彼らは連鎖する事によってその効果を強めていた。屋台が連なる事でその路地が食堂のようになる。植木鉢が置かれていく事で緑の道になる。色を揃える事によって路地の連帯感を高める事。背の高い植物によって路地全体が涼しくなる事。小さな行為が重なっていく事によって、住宅の領域を大きくこえて、住宅区全体の住環境を整え、これにより路地全体が生活景として共有・更新されていた。ここに都市に生活する事の喜びがあるのではないかと。

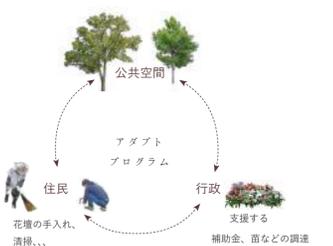
国の姿勢



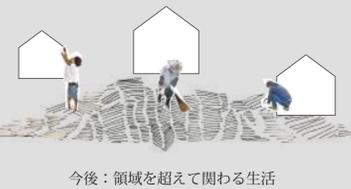
国民の意向



アダプトプログラム



アダプトプログラムの事例



仮説

研究で見てきた場所では、弱く柔軟な生活基盤であったのに対し、一方日本の人が介入する事が難しい土木は、その老朽化と体制が問題になっている。管理責任は国だが、今後の縮小社会に向けて、一部分を住民が日常的に世話をするような柔軟で強い土木が求められるのではないかと。

計画 手間をかける土木

手法

山里が多くの人の手によって支えられているように、都市の生活景を、

- 1 | 道具的土木と、その土木を支える
- 2 | 所作を導く形態によって計画する。

2-1 | 山と水と付き合っていく道具的土木

既存の工法をもとに人の手を加えられる要素を付加する事によって、日常の中で手間をかける土木を目指す。土木は強いものではなくてはならないが、そこにはどうしても人の目と手が必要になってくる。その人の目と手を、日常の中で大地に接するように土木と接点を持てるような道具的土木を提案する。

1 | 雨水浸透壁

保水パネルを床の延長で取り付ける事が出来る壁。日ごろの家の外壁と床の清掃は、大地への雨水の浸透性を維持する事に繋がる。

2 | 水抜きパイプ

山を留める擁壁から出てくる水抜きパイプを親水空間にする事によって、その空間で過ごし日々変化する水を目にする事によって、水抜きパイプの点検に繋がる

3 | 木製擁壁

水を自然に抜く事ができる木製の擁壁。リズムを付ける事によって、ベンチや屋根、花壇のように。自然と土木の調律を花壇の手入れ等によって行う事ができる。

4 | ブロック擁壁

水を自然に抜きながら、階段や花壇に出来る。手入れをする事は点検にもつながっていく。

5 | 通風屋根

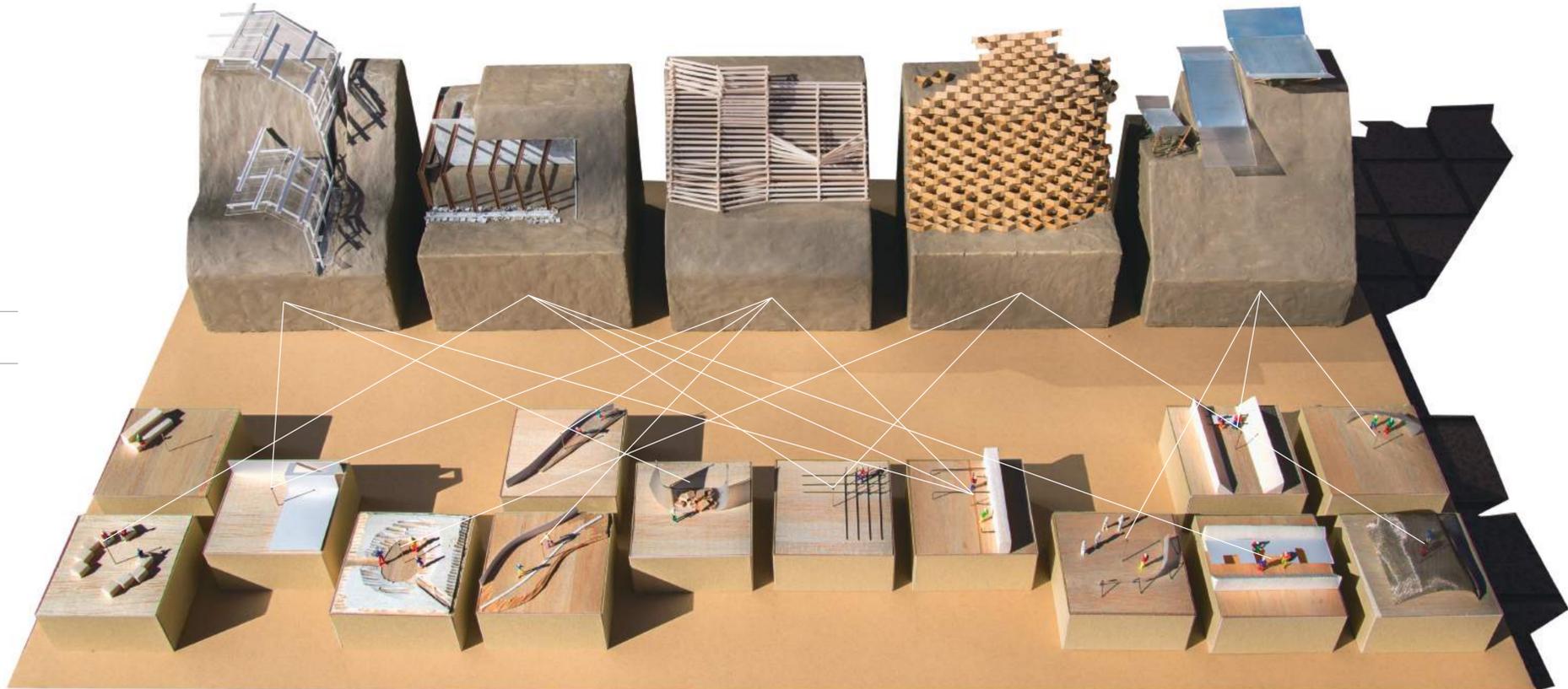
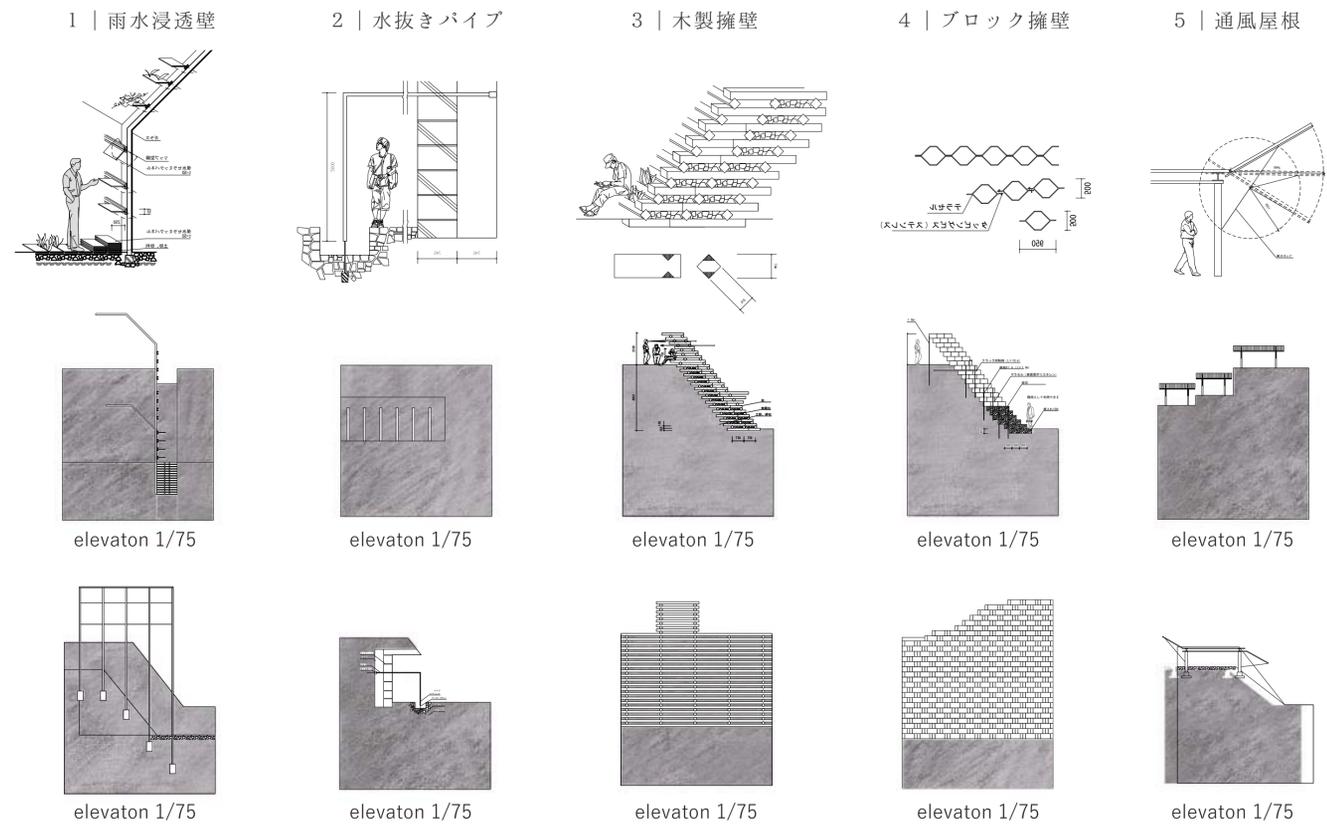
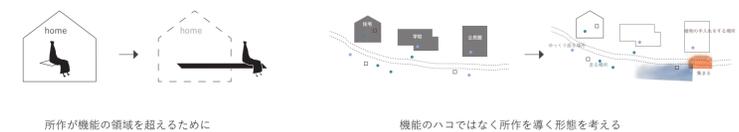
土と人のために、風の取り入れる量を簡単に調節できる屋根。壁や庇にもなる。

2-1 | 所作を導く形態

都市内集落生活者研究より、住環境の改善、または契機となる所作を抽出し、モデル化した。その所作がうまれる背景と、欲求から整理した。一人の所作を導く形態と、複数人の所作を導く形態に大きく分ける事によって、住宅から共空間までの繋がりを意識的に設計する事までつなぐ。

所作を誘発させる

道具的土木の提案を支える所作をどのように導くのかについて考察した。環境を整える行為を、その行為を導く形態によって、住宅の領域を超えて、共空間にまで延長させる。つまり、住宅や公民館をいった機能のハコをつくるのではなく、座る場所や走る場所、眺める場所をつくるという風にする事によって、機能をこえて所作を発生させることを目指す。



3 | 敷地 - 武蔵野台地の風景を共有する鉄道

武蔵野台地の縁と鉄道インフラ

東京都 23 区の交通インフラに地形図を重ね合わせると、武蔵野台地の崖を十数分間風景としてもつ王子～上野間が浮かび上がる。本計画では特に、西日暮里道灌山という古くは西は富士山、東は筑波山という大地を感じ、自らを位置づける景勝地であった場所に対して、手間をかける土木の設計を行う。

西日暮里の道灌山では、縄文時代の遺跡を守る人々、神社のコミュニテイ、中学校、高等学校、専門学校、といった、異なるリズムを持った人々がいる場所でもある。このような都市のリズムの混在の中で、人々の日常によって手間をかける土木と計画する。



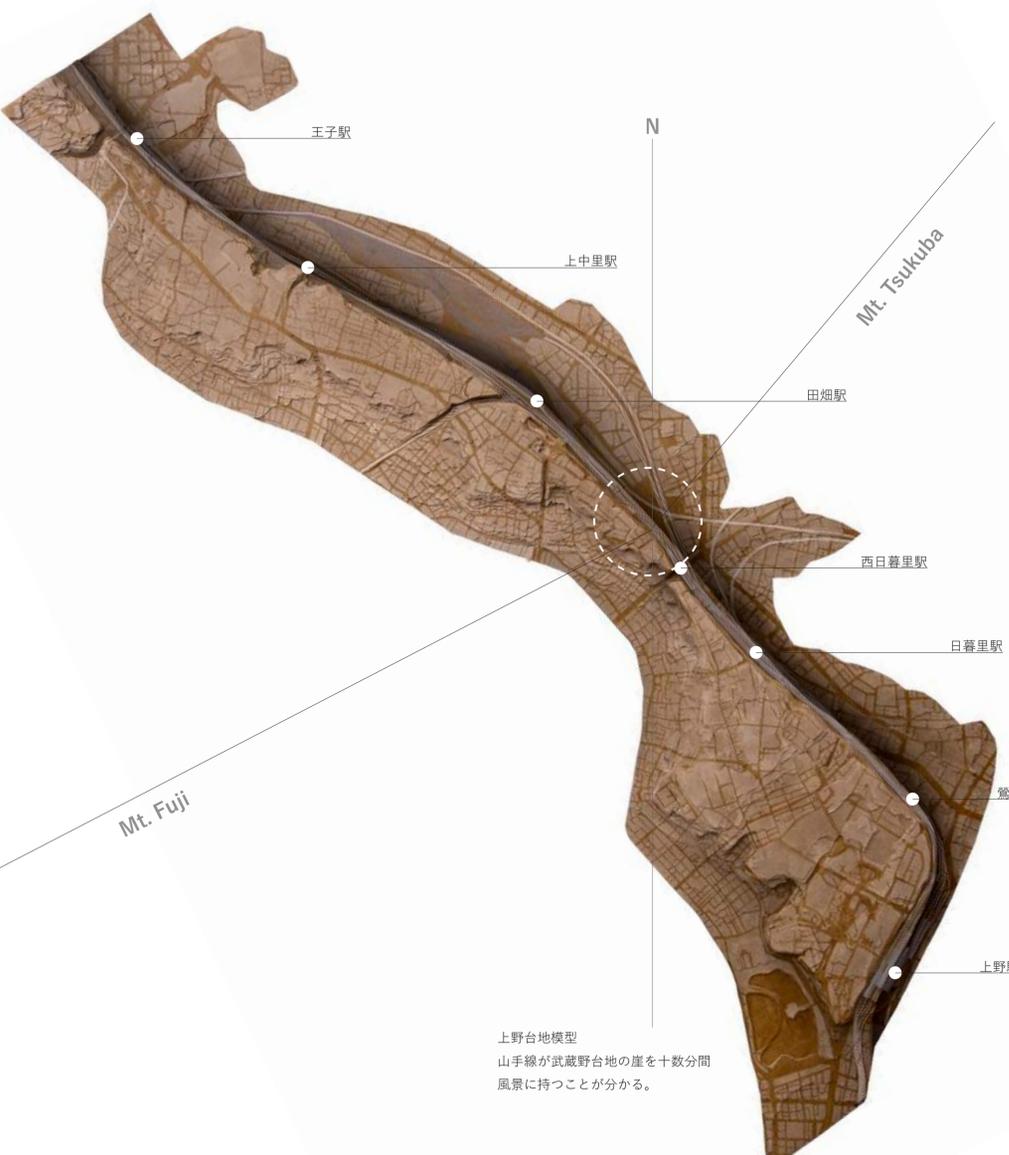
東京 23 区の交通インフラ



地形図を重ね合わせる



武蔵野台地の崖を走るエリア

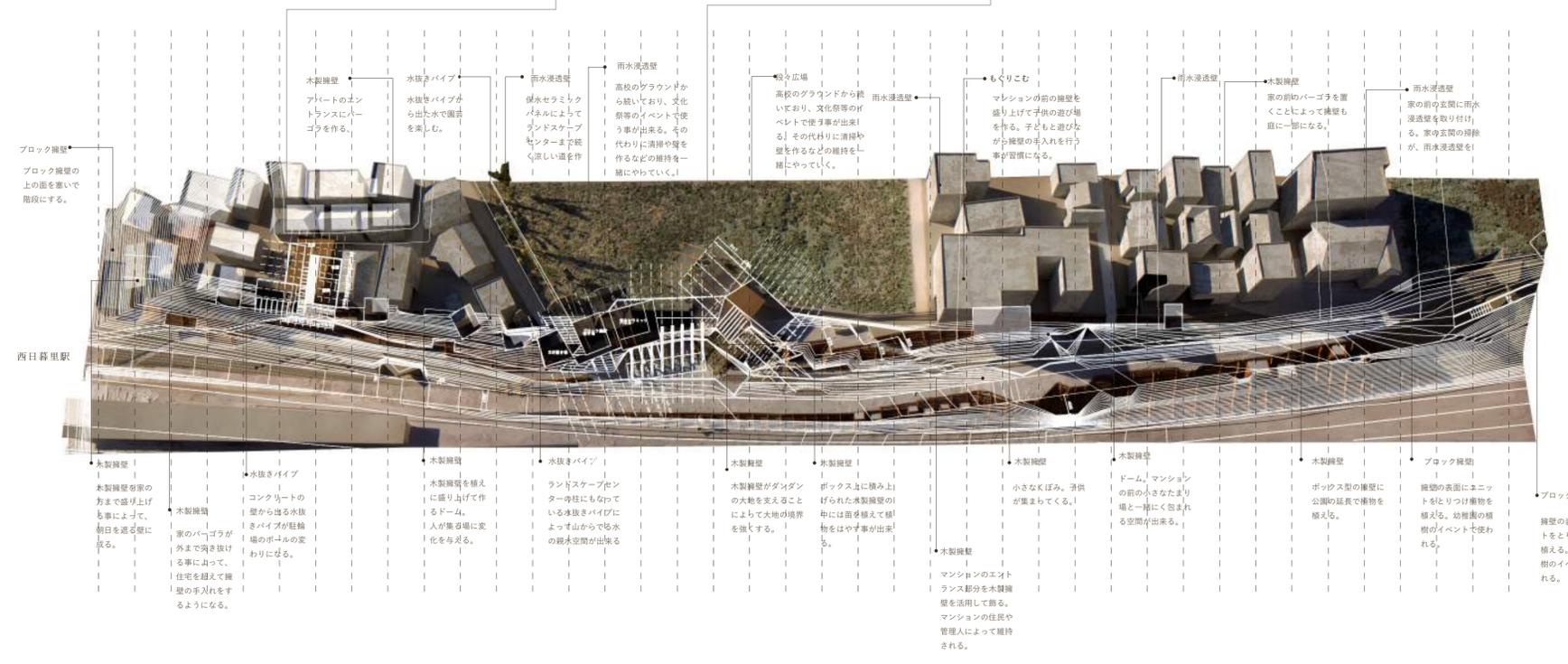


上野台地模型
山手線が武蔵野台地の崖を十数分間風景に持つことが分かる。

4 | 全体計画

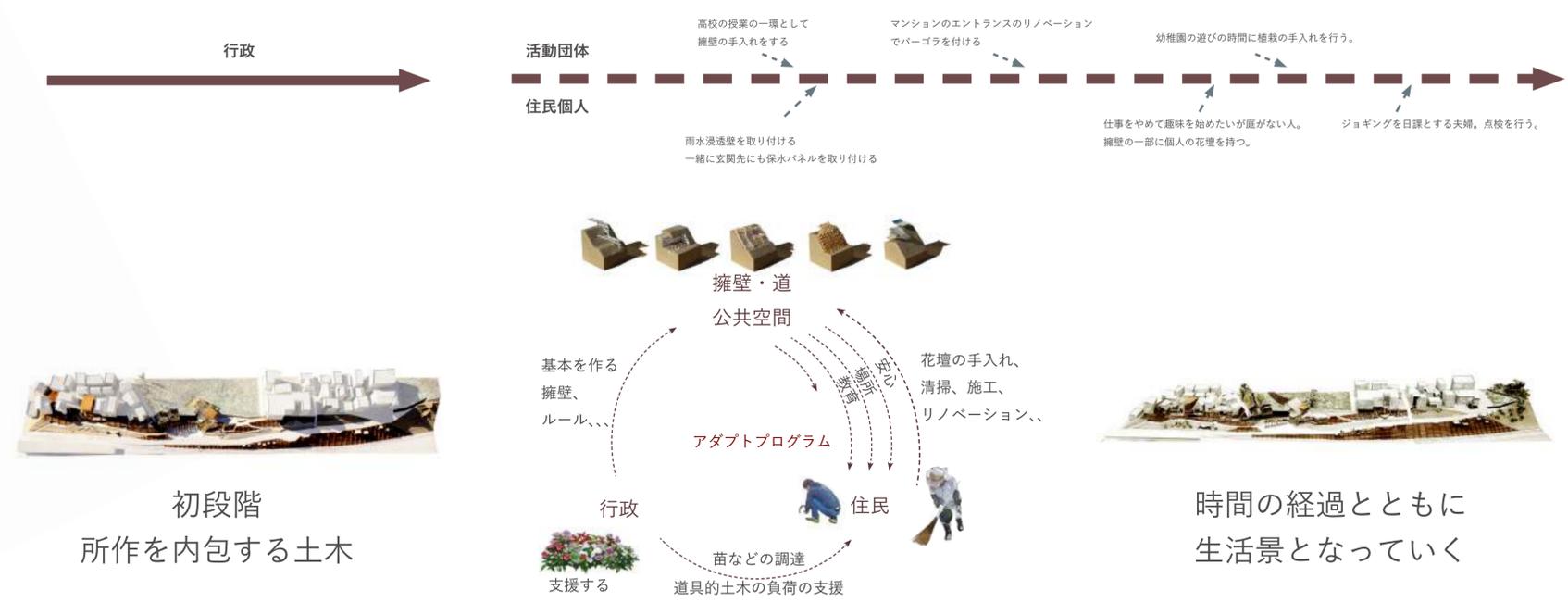
所作を内包する 400m の擁壁と道

西日暮里駅から徒歩圏である 400 m を計画。歩行者と鉄道利用者により共有される生活景となる。西日暮里 - 道灌山に発生しうる所作を導く形態の組み合わせにより擁壁と道を計画した。また、この地域の土木を支えるためのランドスケープセンターと、大地をとり付き合っていく住宅をモデルとして設計した。



プログラム

アダプトプログラムの一環として大枠の管理責任は国、自治体ももち、一部は住民に託す。新宿区で行われているサポーター制度のように、草花の手入れをしたい住民を支える活動や、高校の授業の一環として、また幼稚園の遊びと学びの一環として行っていくなど、土地のリズムに合わせて行っていく。

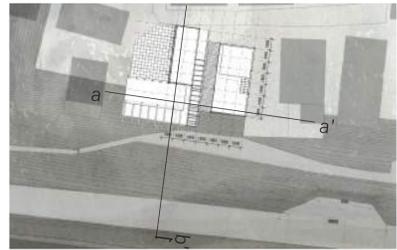
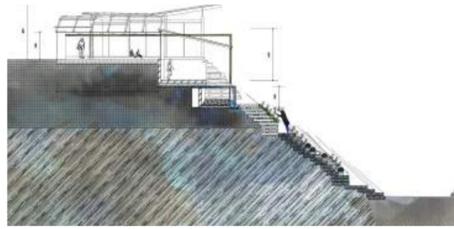
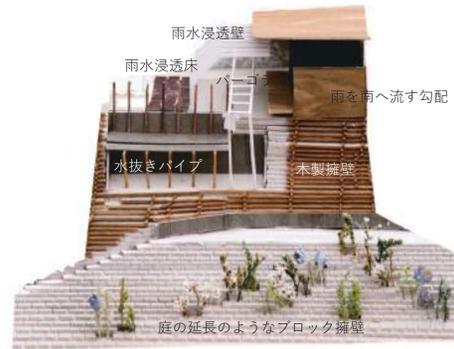


初段階
所作を内包する土木

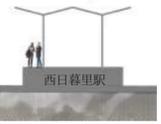
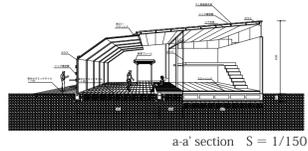
時間の経過とともに
生活景となっていく

5 | 大地と付き合っていく住宅モデル

大地の中で暮らすために、擁壁と溶け合うような住宅をモデルとして設計した。家の中まで続くパーゴラは人の視線と行為を外の擁壁まで延長する。そしてパーゴラの南にあるサンルームでは壁の雨水浸透壁で保水パネルは床まで続く。



plan S = 1/150



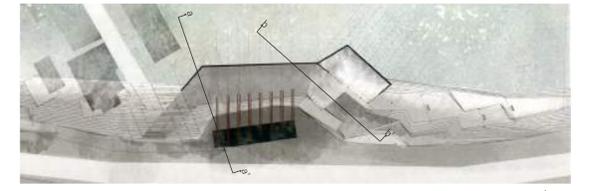
b-b' section S = 1/150

6 | ランドスケープセンター

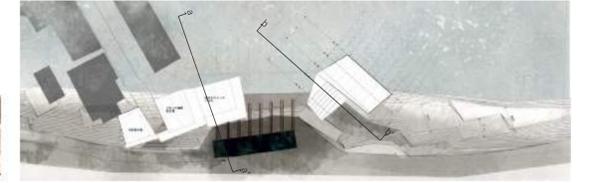
この地域の擁壁と生活を守るランドスケープセンター。材のストックやレクチャー、高校のイベントで使う事が出来る。また、イベントの際には必ず擁壁などの道具的土木の面倒を見る事や、来年の花を一緒に決めるなど、土木と風景に対して参画していく事が文化の風景を成る。



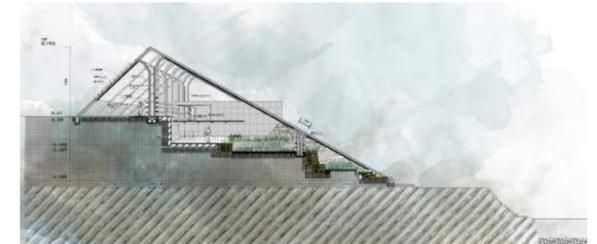
a-a' section S = 1/150



plan S=1/150



plan S=1/150



b-b' section S = 1/150

7 | 暮らしの中で手間をかける生活景



朝、駐輪場に向かう。今までは何もなかった擁壁の一部に花が植えられた事に気づく。土がある事を少し意識する。



雨の日。ランドスケープセンターの通路を歩く。藤棚だと思っていたパイプから水の流れている音が聞こえ、反響している。水の中にある事を感じる。



雨の次の日。散歩道に藤棚の下に水が溜まっている。進んで見ていくと、山の中から湧き出た水によってできた事に気がついた。一つ濁った水が出てくる事に気づき、ランドスケープセンターに知らせた。



朝、洗濯物を干すついでにパーゴラで涼み、木製擁壁の植物の手入れをする事が日課になってきた。パーゴラの世話の延長で外にでると、水抜きパイプから出た地下水が溜まっていた。水をすくって植物に与える。



バザーの日、晴れが続いたので会場が広々とれた。道と広場が混ざり合う。雨が降る場所に保水パネルを敷く事によって植物を育てている。イベントを行うときに一緒に世話をしよう。



ある秋の日。日ごとの擁壁の手入れを表彰され保水パネルを床に敷いてもらった。家の周りの清掃は雨水の浸透性を保つ事に繋がる。



毎タジヨギングする夫婦。隙間から見える光がきれいで一休みする。擁壁の一本に傷がついている事がわかり、ランドスケープセンターで相談した。



隣のマンションのエントランスにパーゴラが出来た。花を植えながら擁壁の手入れを毎週しているそうで、自分も仲間に入れてもらう事になった。



毎年春には、公園で幼稚園児と専門家と一緒に植樹と勉強会が行われている。幼稚園の遊びの時間に花を育てることになった。擁壁を伝って人の集まりが出来た。



駅のホームで、目線に擁壁と祖母の家が見えてくる。誰かが祖母が手間をかけた擁壁を綺麗だといった。誇らしげになる。



久しぶりに祖母の家に来た。一昨年つけた雨水浸透壁が見えてくる。玄関にはタイルと植栽が増え、風景の一部となっていた。祖母の50年の生活が見えてくる。



桜の季節。今年も桜並木が続く。桜並木を抜けると5年前店舗を営んだときにつけた日よけが見えてきた。一時しかいなかった場所に、自分の痕跡が擁壁として残っていた。隣の人のタイルも残っている。また桜の季節になったらこう。